

年少讃歌

Sちゃんに

藤本美穂子

新しい出会いがあつて、同じことのくりかえしの中で、あなたたちと私だけの時間が始まりました。

基本的には変えがたい幼稚園生活の中で、目にするもの、聞くもの、触れるもの、全てが初めてというあなたたちの新鮮な気持と同じものを、いつも持ち続けるのは、そうやさしいことではありません。

一年一年の時間の重みが変われば加わる程、「あなたたちだけの時間」の保障はむつかしくなります。

私にとっての時間の重みは、あなたたちにとっては迷

惑なことであるにちがいません。あなたたちと同じに瑞々しい感覚にはとても及びませんが、努力してあなたたちに近づかなければならないと思っています。

*

私は五才児―一番年長の人達とのおつきあいが長く、三才児―一番年少のあなたたちとおつきあいは、年長の人の半分にも満たないのです。けれども短い数年で、私は年長の人たちから得たものより、多くのものを得た

ような気がします。

三才児、四才児は見る機会もなく、五才児にしか接することができなかった私が、初めて三才児に接した時の驚きは、この人たちも子どもだったんだろうかということにはじまります。

知らず知らずのうちに、五才児を通してのみ子どものイメージが出来上っており、三才児はその中に入りきれない、はみ出してしまふものだったのです。

言葉がほとんど通じない、心に届く方法がまるでわからない、私が今まで学んできたものは何だったのだろうか。

貯えたつもりでいたものが、砂の城を波がさらひ跡形もなくなるように、ものの見事にくずれ去るのを覚えた時の衝撃。

私は三才児と接することによって、もう一度最初から子どもというものをとらえなおさなければならぬことを教わるのです。

三才児に出会うことがなくても、遅かれ早かれ必ずこ

の衝撃は味わったかも知れないと思います。今までわかったつもりでいたことがそれ程長く子どもたちに通用する筈がありませんから。けれども三才児を通してこのことに気づかされたのは、とても自然なことだったとうれしく思っています。

子どもってなんだろう、どんな存在なんだろう、子どもにどんな意味があるんだろう、そして子どもを教育するというのはどういうことなんだろう、教育ってなんだろう、というぐあいに、仕事をする中で明らかにしていかなければならないことが、具体的に見え出したのですから。

*

私が、三才児が五才児のイメージからはみだしてしまふと感じたことというのは、子どもたちがひとりひとり何とちがうことか、子どもたちは何と多様な反応をすることかという、ごくあたりまえのことについてなのです。私にはこのあたりまえのことが本当にはわかってい

なかったし、見えていませんでした。

子どもたちは、たしかに私の言葉や動きに対して多く反応するわけですが、その反応のしかたがひとりひとりちがうのです。子どもは、自分をとりまいている全てのものの影響をうけながら、幼稚園の環境、友達、先生に反応します。

子どもをとりまいている全てが、ひとりひとりちがうのです。もちろん同年齢であるとか地域が同じとかというごくわずかの共通点がありますが、ひとりひとりちがうのです。それが見え出した時、私はどのように対処したらいいのかわからなくなってしまいました。

私は、子どもたちに教わる以外に方法はないと思って
います。

* * *

Sちゃん、あなたは四人兄弟の三番目、六才のお兄ちゃん、四才のお姉ちゃん、三才のあなた、一才の妹。

お姉ちゃんも昨年、三才のひよこ組にいましたが今年中組にいます。そしてあなたが今度ひよこ組に入ってきました。

お母さんが入園直前までおしめがとれないことを気にしていらいしゃいました。あなたは三月生れ、四月生れの人は同年齢でも一年のひらきがあります。体格も一番きしゃでしたから、気づかわれるのも無理のないことだと思いました。

あなたはお姉ちゃんと一緒に登園してきました。私と子どもたちの間の糸が混線している時には、あなたはどうな意味においても目につく存在ではありませんでした。

そして一通りの園生活がわかり、もの珍らしさが失くなってくると、あらためて、お母さんがいないということ、自分を中心にしてなりたっていない世界があるということなどに、気づき、子どもたちは性格や気質によって、あらわし方は様々ですが、不安を感じはじめます。
Sちゃん、あなたは幼稚園に来るのがおっくうになります。

した。

幼稚園に来て、声を出さない、話さない、椅子に座って動かない、お姉ちゃんと一緒にいられる間はくっついてはなれない、という状態が子どもたちの目にも少しちがうと見えはじめました。

私にとって救いだったのは「いや」と「いい」が首の動きではっきりわかることと、絵本やおはなしをする時には、声をかけなくても見えるところに動き、とてもよく聞いていたことです。

あなたがいつもどこにいるかということには気を配りましたが、自分の部屋に居ることを強いることはしませんでした。

お姉ちゃんと一緒にいられなくなるとあなたは自分の部屋のあなたの椅子に腰かけてほとんど動くことがありませんでした。

そんなあなたに私はよく声をかけました。

「こんなことやってみない？」

「入ってみない？」

でもいつも「いやだったらやりたくないまでやらなくてもいいのよ」という言外の気持を大切にしながら。

あなたは入ってきませんでした。毎日のささやかなおやつでさえも、両手を後にくんで首を横にふるのです。お誕生会の特別おやつでさえも、手をつけようとしませませんでした。

Sちゃん、みんなの中に溶けこんでいけない時に、みんなの視線の中で——見つめられているいけないには関係なく——物を食べるということはたやすくできることではありませんね。ある時、私は後に手をかくすあなたに、「小さくわってあげようか？」と声をかけてみました。割っていただくほどのおやつではなく、そうすれば姿を止めがたくなるようなものなのですが、それでもあなたは首をたてにふってくれました。

あなたを見ていて、私はいくつかのことに気づかされます。

床に腰をおろすという何気ない動作も、緊張している時にはとてもむづかしいことなのだということ。

空箱などを使って好きなものを自由に作る事が子どもたちは好きです。ダンボール箱を利用した材料入れを手に取りやすいように床に並べておきますと、子どもたちは、しゃがみこんでつくります。いろいろなおもちゃで遊ぶのもたいていは床を使いますから、子どもたちが床にしゃがむそのことに今まで注意して見たことがありませんでした。

あなたは、このしゃがむという姿勢がとれるまでの心の動きを、スローモーションフィルムがまわるように見せてくれました。

このことからごく自然にしゃがんでいるように見える行動にも、自分にとって乗り越えなければならぬ壁を経験する子どもがいるということ。もしかすると、どの子どもたちも幼稚園の床に初めてしゃがむ時には、瞬間ではあるにしても、あることを乗りこえるのかもしれないというふうに思えてきます。

そしてこれに似た葛藤はあらゆる場面であるにちがいないと。

また、私が差し出す手をあなたは素直に受け入れてはくれませんでした。

私と手をつなぐことをたいていはみんなが喜びますから、あなたが不安に思っている時、手をつなぐことでいく分か楽になるのではないか、手をつなぐことによってあなたに近づける緒になりはしないかというさもししい願いや期待をこめて手を差し出したにちがいません。

あなたは手をひっこめた、じゃんけんにはなかったのは、あなたの私への配慮だったのかもしれないね。

*

たった一枚の絵を描き、自分にできる確実なことだけ参加し、ほとんど話すことなく、水あそびは見学で通し、箱製作では驚くほどの手際の上さと根気の上さで楽しいものをつくりで一学期を終え、二学期をむかえました。

運動会を数日後にひかえたある日、私はお母さんに「もしかしたら、当日雰囲気は圧倒されていくつかの競

技に出ないで座っていることがあるかもしれないませんが、とがめることはおっしゃらないください、前もって注意なさることもないように」といった意味のことを伝えました。当日あなたは、気おくれすることもなく全部の種目に参加できました。その頃から門を駆足で入ってくる姿を見ることができました。

秋の終りの参観日に、私はあなたたちと、四月からぼつぼつに遊びながらつくってきた、「魔法使いのおばあさん」の劇あそびを観ていただきました。

悪いおばあさんといしておばあさんがいます。二人はそれぞれ雲の上に住んでいて、ほうきに乗ってひよこ組にやってきます。悪いおばあさんは、子どもをつかまえて食べてしまいたいと思っています。子どもたちのおすれものはみんなとってしまって、子どもたちを困らせます。いいおばあさんは子どもが大好きで、雲のおふるに連れていってくれたり、雲でお菓子を作ってくれたり、悪いおばあさんがとっていったものをそと取りに行ってくれたりします。悪いおばあさんがいやがること

を教えてください、栗のいがやこわいお面でびっくりさせたこともあります。

そしてこの日、

いいおばあさんは雲の遊園地を作りました。いつも空をとぶ時は、おばあさんのほうきに乗っていましたが、この日は小さなほうきをみんなに一本ずつ作ってくれました。小さなボタンがついていて、それで自分が操作するのです。遊園地についたとたん悪いおばあさんに見つかり子ども達は雲の中にかくれます。が、ほうきを持っていかれてしまいます。いいおばあさんの協力でほうきをとりかえし、遊園地のジェットコースターやコーヒーカップにのってあそんでかえってきた、というおはなしです。

これを見てあなたのお母さんは小さなメモを下さいました。

「もうすっかり溶けこんでいるのがよくわかります。目がちがいます。椅子には座っているけれど心はとも動いています。もうちょっとからだかふと動き出すまでに

は」

二学期のおわりの小さなクリスマス集いでは、あなたはみんなと楽しんでいました。お母さんへのプレゼントも、ペンダントやエプロンやポシエットをとめていねいにきれいに作ってあげました。合奏もフォークダンスも楽しんでいましたね。

*

あなたが望んでやり出すまでには十ヶ月近くの時間が必要でした。私はいつも、こんなやり方でいいのだろうかと思わないですごした日はありません。しかし私はいつもこのように考えていました。

「やりなさい」「やるのです」と上から決めてかかるのは手輕で、受ける方もその方が楽だということがありません。けれどもそれでは自分の選択の余地がありません。

自分の人生を自分が生きるためには、自分の責任において、自分で選ぶとということがなければなりません。私は、Sちゃんが一つ一つ自分の責任において選ぶ

ということを、何よりも大切なことだと考えていたので、

「やってみない？」決めるのはSちゃん、あなたです。

「したくない」「やってみようか」どちらかです。次の時又選択をせまられます。決めるのはSちゃん、あなたです。判断することが、あなたを越えるものなら、それは無理なことです。あなたにとって一番身近なこと、あなた自信に関わることですからあなたに選択を求めることは、きびしいことではあっても無理なことではないと考えます。私はいつも待っていました。いつかあなたの心が動き出すその時の来るのを、疑わないで。

*

あなたの仲間たちは「お椅子はなぜあるの、おはなしをきく時、なぜお椅子に座らなきゃならないの、立って聞いたっていいでしょ、聞きたくない時だってあるんだよ、出たい時お部屋から出るのはいけないの」とからだに問いかけてきます。

先生という私にとって都合がいいというだけで椅子に座らせるのではないのだろうか。私にとってやりやすいということだけでためらいもなく当然のこととしておしつけていることがないのだろうか。

それが教育という名のもとになされていることがありはしないだろうか。

あなたたちは、私の力にあまるきびしい問題を次々につぎつけてくれます。

仕事を始めた当初、私でも真剣に二十年もし続けるなら、少しの自信は持てるのだろうかと秘かに夢見たものです。

二十年越えてしまった今、自信はおろか、もうこれ以上は見たくないと自らの目を閉ざし、闇の中を杖をたよりに平安を求めてさまよい歩くオイディプスの姿がうかびます。不安であぶなっかしげな姿を感じています。秘かに夢見た姿と何とへただりのあることでしょう。

けれども私はこう考えて慰めています。

苦しい間はともかく、苦しくなくなったら仕事をする

のはよそうと。

苦しいと感じられることが、まだしも私にのこっている誠実さかもしれないから。

そしてそれが失くなることは、子どもの前に立つ最小限の資格を失なったことになるのだと。

(大阪・長居幼稚園)

